

過去の【今月のコラム】

2022年5月:コラム

「他者を動かす力」



本来であれば5月のこの欄は、会費徴収システムのトラブル復旧のお知らせを掲載する予定でしたが、未だめどがたっていない状態です。

頻繁に情報が変わる可能性を考え、上記バナーからの情報を定期的にご覧いただければと思います。このように長期にわたってご心配、ご不便をおかけし申し訳ありません。

今月、せっかくこの場を提供いただいているので、タイトルのことについて少し考えてみたいと思います。

私は、自分以外の人に「こうして欲しい」と思ったように動いてもらうには大きく2つの方法があると考えています。1つは、今世界的に問題になっている戦争に代表される、武力、圧力、暴力等による方法。学校現場では、「体罰」と言われるような方法です。確かにこの方法は程度にもよりますが、手っ取り早く相手を思うように動かすことはできるかも知れませんが、その脅威がなくなれば元に戻ります。相手自身が納得して自分から動いていないからだと言うことは皆さんもお分かりでしょう。

30年前、大学を出たばかりの頃、先輩から「ADLということばは早くなくしたい。」と言われたことがあります。そのときにはすぐには理解できませんでしたが、その後、ADL向上のためのクンレンと称し、障がいのあるお子さんが辛い思いをしながら日常生活を自分で行うために日々を過ごしている姿から、QOLあつてのADLなんだと思うまでには時間がかかりました。

最近、「あなたのためだから」と言って、厳しいクンレンを強いられることは減ってきてはいるもののまだまだ残っているのではないかと危惧しています。

もう1つの方法は、「この人の話なら聞き入れてもいい」という、信頼関係を築くことだと思っています。これはすごく時間がかかります。コツコツと積み上げて行くしかないからです。

積み上げても重大なミスをおかせば一瞬で崩れ去ってしまうのは、今回のカード情報漏洩でも学んだことです。幸い、皆さまのご理解のおかげで「心配による質問」は多く寄せられている中、「苦情」が出ていないのはたいへんありがたいことと感謝しております。

ことばでは簡単ですが、どうしたら信頼関係を築くことができるか？ここは結果を出すことが1つの一因と考えています。私のように学校職員は、持ち上がりを前提としなければ1年間という期間で結果を出すことが求められます。ここはSTさんたちとの大きな違いだと思います。

私自身、今までに信頼を崩してしまった失敗経験もあります。しかし、ピッタリの支援方法が見つければ、どんな重度障がいのあるお子さんでも1年の間に心地よい表情を見せたり、笑顔になることが増えたりするのも実感しています。

5月連休明け、いよいよ新年度が本格的にスタートするにあたり、自戒の念も込め、改めて今年度の計画を考えていきたいと思っています。

2022年5月 子どもの発達支援を考えるSTの会
会員・システム担当

「新年度、一步前へ」



私は1973年からST(Speech Therapist)をしています。

ST歴は今年で49年、来年で50年になります。

STとしてはまだまだ未熟者の自覚がありますが、「STって仕事はすばらしい!おもしろい!楽しい!」という気持ちをずっと持ち続けられたのは実に幸せなことです。

諸先生や先輩方、そして仲間たちのおかげと、感謝にたえません。

1960年代、アメリカで言語病理学を勉強して帰国したST分野の大先輩たちによって日本でのSTの活動が始まりました。

1971年、新宿区早稲田に「国立聴力言語障害センター附属聴能言語専門職員養成所」ができ、日本初のSTの系統的養成が始まりました。

なお、上記養成所はその後所沢に移転、国立障害者リハビリテーションセンター学院の中の言語聴覚学科へと発展し、大卒者対象2年間の養成施設になりました。

<http://www.rehab.go.jp/College/japanese/>

養成は始まったものの、公的に定められた資格はなく、「言語治療士」「言語療法士」「聴能言語士」「臨床言語士」など、いろいろな名前が併存する時期が長く続きました。

一方、教育分野では保護者の要望を受けて1950年代から各地に「きこえの教室」「ことばの教室」の創設が始まり、「きこえとことばの先生」が大きなはたらきをしていました。現在は全国公立学校難聴言語障害教育研究協議会(全難言協)のもとに集い、研究・実践活動を続けています

<http://www.zennangen.com/>

その後、紆余曲折をへて1997年、厚生労働省管轄の医療職として言語聴覚士(ST)の国家資格が成立し、資格取得者は「言語聴覚士」と呼ばれるようになりました。

子ども分野の言語聴覚士の業務は、実は、教育分野の「きこえとことばの教室」の先生方の業務と重なる部分も多いのですが、医療職として養成され、短期間に明確な成果をあげなければならないという使命感から、お子さんの現状に合わない無理な訓練に走ることも見受けられます。

もちろん、科学的態度、測定可能な指標を持つことの大切さは言うまでもありませんが、「きこえ・ことばの教室」の先生方ともっと交流できて、教育分野の特色ともいえる「長い目で見る」「じっくり育てる」「子どもとその保護者に寄り添う」態度に学ぶことができれば、言語聴覚士(ST)の仕事にも、もっと豊かな広がり生まれるだろうに、と残念に思うこともよくあります。

2002年に「子どもの発達支援を考えるSTの会」を立ち上げた時、「ST」という名称には国家資格としてのST(言語聴覚士)はもちろんですが、「ことばの教室の先生方」(Speech Teacher)にも多く加わっていただきたい、という願いを込めました。

今も、少数ながら「ことばの教室」の先生にもご参加いただいています。

一部地域では、伝統的に「きこえとことばの教室」の先生方と、病院等に所属する言語聴覚士(ST)と一緒に活動しており、お子さんの利益を第一に考える“連携”がスムーズに行われています。

子どもの発達支援にかかわる言語聴覚士(ST)は、もっと地域や学校と仲良くなり、自分たちの専門性を提供することを通じて、子どもさんと保護者の幸せを実現する方向を模索したいものです。

さて、私たちの会は長い間「子どもの発達支援を“考える”STの会」の名称のとおり、“考え”たり、学んだりすることを大事にしてきました。

でも、「人生を通じて」「一貫した支援」や、多職種、多分野の「連携」、地域での協力体制づくりが一段と大切になって来た今、“考える”だけではなく、STの社会的役割を自覚して外に向かって発信し、連携を進める活動に踏み出すべき時期が来たようです。



いきなり大きなことができるとは思えませんが、新しく運営委員に手をあげて下さった多くの方たちのお力に支えられて、新年度のスタートを切ります。
会として一歩を踏み出すために、ご支援、ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

2022年4月 子どもの発達支援を考えるSTの会 代表 中川信子

2022年1月～3月:コラム

新年明けてから3月までは、このコラム欄を「重要なお知らせ」として、会費徴収システム「会費ペイ」のクレジットカード漏洩事故に関する内容をお届けしておりました。

長期にわたるご迷惑、ご不便、ご心配をおかけして申し訳ありません。